

原口早生(はらぐちわせ)

育成者：原口 茂

来歴：「宮川早生」の個体変異

特性

極早生は果皮、果肉の早いのが特色であるが、原口早生は着色は早くないが、果肉の熟度が早く進み、他の極早生と同様に早く着色する。果皮の色づきから見ると、いわゆる極早生ではない。ところが、果肉の色は明らかに濃く、熟度が進んでいることを示している。このように原口早生は熟度の違いがある温州ミカンである。

■栽培特性

結実期に入るまでは、葉は普通温州のように大きく、枝の伸びも良く、樹勢は旺盛である。結実期に達すると、葉はやや小さくなり、「興津早生」程度の樹勢となる。

■果実特性

海岸沿いの温暖な温泉地帯で、果皮は10月上旬頃から着色し始め、完全着色は下旬である。果肉は9月下旬にはかなり色づき、10月中旬には濃橙色になる。果肉先熟型ともいわれている。親の「宮川早生」に比べると果肉先熟だが、果皮と果肉の熟度は「原口早生」が最も調和していると考えても良い。糖度は10月下旬には11度以上となり、11月には12度を越す。酸含量は10月下旬には1%以下になる。じょうのうは薄くて柔らかく、果汁は多く、食味は極めて優れている。「宮川早生」よりも大果系で、L、LL果も食味が良いので、十分に摘果し大果の優品を目指す品種である。12月になると味ボケ気味となり浮き皮もであるので、主な出荷期は10月下旬から11月である。

■地域適応性

本品種は発生地の大西海農協で200ha栽培され、大村湾沿岸の他のミカン産地に広がっている。福岡県の銘柄産地山川町でも早くから採り入れていた。優品を産するには細心の注意が必要だが、「宮川早生」や「興津早生」の産地は本品種の適地と考えて良い。

■問題点と対応策

果肉の熟度は進むが極早生ではない。「宮川早生」や「興津早生」を12月まで樹上におくとすばらしい食味になるが、その食味を11月に作り出す完熟型品種と思えば良い。大果系だから、その特徴を発揮させることが大切である。マルチ栽培で食味は飛躍的に向上するので、マルチ栽培など糖度を高める工夫が望まれる。

(岩政正男)